

# 画期的な労作

樋口清之

# 高群逸枝全集

近代歴史学の一部として、日本女性史を最初にとりあげ、それに体系をつけ、古い趣味的な女性史から、はつきり切り離した第一人者としての著者の功績は、すでに定評がある。多くの史料をもうらして博引多識、しかも終始一貫した史観をもって貫かれているその研究態度には、仮に一部の学者が評するような、公式論的な考え方の部分があるにしても、これはこれとしてすぐれた研究である。日本女性史は、著者の二十数年の精進を経て、日本ではじめて近代史学の列にはいったといつて過言ではない。

その著者の全集の第四巻に当たるのが、この「女性の歴史1」であり、次の「女性の歴史2」をもつて、日本女性史の部分は完成することになっている。そして、これは他の既発表の「母系制の研究」「招婿婚の研究」「日本婚姻史」「恋愛論」などと、併読されることによって、著者の女性史の一応の全容と、その主張の内容を正しく理解することができる。

(国学院大教授)

書評・北海道新聞66年3月16日号1

# 高群逸枝全集

全10巻

菊判クロス装製貼函入  
全巻揃定価合計七〇〇〇円  
詳細内容案内送呈〒25円

■全巻内容

- 第1巻 母系制の研究 一八〇〇円
- 第2巻 招婿婚の研究I 一八〇〇円
- 第3巻 招婿婚の研究II 一八〇〇円
- 第4巻 女性の歴史I 一六〇〇円
- 第5巻 女性の歴史II 一七〇〇円
- 第6巻 日本婚姻史恋愛論 一八〇〇円
- 第7巻 評論集/恋愛創生 一七〇〇円
- 第8巻 全詩集日月の上に 一五〇〇円
- 第9巻 小説/随筆/日記 一八〇〇円
- 第10巻 火の国の女の日記 一五〇〇円

高群逸枝雑誌 第二号  
一九六九年一月一日発行

責任者・橋本憲三 発行所・高群逸枝雑誌編集室 (郵便番号 862)

水俣市幸町六の一五 定価一五〇円

# 高群逸枝雑誌

最後の人(二) 石牟礼道子  
《拾遺》母系制 高群逸枝  
手紙と書き入れ 橋本憲三  
母への手紙 石牟礼道子  
たより 村上信彦

刊行の趣旨その他

長井松合河村石  
・飯井魁永田野上牟  
・島魁一伍宏信彦  
・仲一郎子彦生三

## 写真集 その2

### 高群逸枝像<部分>

(2ページ)

朝倉響子氏作。レリーフ。  
前号このらん参照。

### 私の銘

(3ページ)

57年に紙上年賀状として  
熊本日日新聞に掲載された  
もの。銘そのものは以前の  
作。

### 森の家

(6ページ)

1931年に女性史研究のため  
建てられた家。  
66年消滅。  
66年7月10日桑原史成  
氏撮影。

### 著作原稿(一部)

(27ページ)

研究室にのこされた著作原  
稿。  
1965年7月10日石川猶  
興氏撮影。



新年おめでとう

私の銘

1957 元旦

人の一生は知らぬものだ

花のさかりも一時だ

ソノさかりさえもいづれもある

と眞理に生きたよ

千の名よりも一の眞理に

高群逸枝

# 白報後の人

2

序章

森の家の記

(一)

白年れ道子

九月二十五日夕、ふたたび世田谷森の家着。

台風、大津から先を切断、木曾川あたりに上陸。わが「はやぶさ」一晩大津泊り、京都まわりで新幹線なるもの乗り替え一日遅れて首都入り。首都とは森の家である。

それはなんとという崩壊のダイナミズムであつたらう！。いやそのダイナミズムを司る森の意志といふべきであつたことだろう。

その昔、この森に立ち入った故郷の詩人は「アッシャー家の崩壊」と、この館のことをなぞつたものであつた。

のである。

窓々の灯りがまわりの騒音を吸収しはじめ、この一帯に静寂な光芒が訪れようとする。団欒や疲労や思索や虚無のどっかりとした夜がそのようにしてやってくる。

われわれの森はと云えばそれらの中にそびえ立ち、その夕闇の一瞬を司る。そしてわれわれの森は、さんばらに垂れ下っている。森の中の樹という樹々は下枝を折り下げ、もつとも巨きかった檜群のうちの四本ほどは根元から、土を掘りあげはねあげ、森を縦横に遮断して倒れこんでいた。

わたしは斧を持たなかつた。濃い闇が来る。不思議な歓喜にわたしはむずむずとする。ここは神々の原野である。彼女は熊襲と隼人族の娘だった。樵夫よ、老いたる樵夫よと、わたしは森の奥の微かな灯りにむかつて心の中で称ぶ。K氏は全集最終巻の編纂を抱えたまま風邪をひいて、二階書斎のベッドで仰臥のまま、その仕事を続行中である。一昨夜の台風は森の道を遮断した。恐らく氏はこの外界を窓から一べつし、フムフムとうなずき、何ごともなくベッドに打ち倒れていられるに相違ない。けもの道をいま、こしらえてさしあげます。わたしはそ

われわれの女あるじは、否定もしなければつよく肯定もしなかつた。彼女は何時でも、何でも許容する。

玉電上町から桜通りをつきぬけると、旧満中在家の、その在の土の香の残る中に東京農大を中心にする風致地区があらわれる。ここはまことに奇妙で親しい一角である。古い郊外住宅の重厚さの中に、新しい庶民層の軽アパートの急ごしらえの外階段などが打ちまざり、そのあいまには大根畑や野壺が残っていた。その隣にはまたひいらぎのある庭園や庭園灯や、つまりそれら田園と都市とが混在し重なりあつて、夕闇の陵線や灯りを造りだす

う思った。わたしの俄か旅行着は忽ち羊歯や野ぶどうの蔓や、藪からしどものとりことなる。

ながい探検が終わり、わたしは壮絶な姿となつて館の玄関にたどりつく。玄関が開かれている。十燭光のあかりの下に白い木の葉が、いや葉書が一枚置かれている。拾いとり近々と目にくっつけてわたしは読みとる。

「歓迎 どうぞ二階へ」

なんと本質的な夜だ。わたしはひたいの汗をかきあげる。羊歯や山椒や野茨やらの匂いがぶんぶんする。そのようなものを躰中にくっつけたまま、わたしはゆっくりのぼりはじめる。深遠のきざしを。

やがて、氏のさわやかな洪水をきくことができるであろう。いやひよつとすると、氏は重態かもわからない。

一場の握手でわたしは現実世界へ這入りこむ。

うす高い読みさしの本。この夜氏の下から、キュリー夫人伝をみつけたす。

十月一日

汝洪水の上に座す

神エホバ

吾日月の上に座す



### 詩人逸枝

時代は詩人逸枝にへきえきする。吾日月の上に座す、とは。神の上に己れをおくとはいやべつに詩人を持ち出すまでもない。あのおなごが、という一べつでよいのである。彼女の心をいえばこうなのだ、と思いつながらがばとわたしは森の家で目ざめる。

詩人汝に告げん。

あらゆるものは天才である。独創というものはありうべきものではない。因は決定されたところからくる。時代的普遍からくる。

個人は個人ではない。一切である。個人の哲学が偉大であるという理由はない。それと同様な哲学をあらゆるものもまたもっている。ただ、表現する機縁に打たれていないというのみである。

詩人汝に告げん。

個人は個人ではない。普遍である。

玄人の芸術、専門家の芸術は結果において虚妄で模倣で、私どもにとってはなんでもない、というのが彼女の

“文芸的意見”であった。それもまた彼女の“共同体”思想だった。

……

わたしたちは銀座街頭で、幾千のピラに見舞われた。群衆はジャコバンの精神の、血染めの行列の上の模様となつてひろがった。

……

わたしの言葉は都会の文法のために  
はからずも原始性をうしなってしまった。

……

『東京は熱病にかかっている』に彼女はそう書いたが、現代詩は古代祭祀時代の神示とはかわりないことであつてみれば、彼女の詞は、本来の資質の象徴性へと先祖還りすればよいのである。地の声とは、還ってくることをいうのだ。先生のご容子要注意。

十月三日

桜通りに買物に出て門を入ろうとすると、銀杏樹の下で五・六歳の男の子二人遊んでいて、ひとりがいぶかしげに声をかけた。

「オバチャンち、ここ？」

という。世田谷の住民からはじめて声をかけられたのである。わたしの家というわけではないけれどと思いなから、

「そうよ」

とふり返って買物のカボチャを抱くと、

「オバチャンち、こわいね」

という。

「あら、こわいの、どうして」

「こわいよ、とても」

「ちっともこわいことないのよ、こんな大きな樹がいっぱいあるし」

「こわいよ、晩にここ通ると、とってもこわいよ、お化けの樹みたいだよ」

二人はこもごも門から研究室へ続く「けもの道」をのぞきこみ、へっぴり腰でしんけんな表情をしている。その様子いかにもかわいらし。K氏に報告。

この日はじめて「経堂」ゆき。岩波の「科学」探しと土地勘訓練のため。地図書いていただく。東京農大北門から和光学園。まっすぐ行って坂を下りるところ学生アパートらしき建物つづく。軽部家を目で探すと和光学園

の間から「森」の梢がみえる。ここらあたりはまだいた

るところに武蔵野のおもかけ残っている感じである。経

堂駅は地下駅である。踏切り、小田急線であると通行の

人から教わる。「はと号」通る。本屋さんに「科学」な

し。「自然科学概論」もなし。帰途、急に生汗たらたら

と背中と胸を流れる。K氏のご健康快調と見うけられず

ねむれぬ夜が続いているのである。急に心配になる。

ご無事でよかったとぼんやりしていると、お茶を入れて下さる。恐縮して更に茫となつておとごじぶんでおのみになり、

「どうか(どうです)、僕のお茶の入れ方上手でしょうが」

「ほんとうにおいしゅうございます」

とご返事すると、

「ちっと牛乳の匂いのするばってん」

とおっしゃる。今朝の牛乳カップをわたししが洗い忘れていたのである。それではと目がさめて笑い出してしまった。お仕事のお邪魔をしている上はせめて十分に先生のご健康を管理し、という心づもりであったが、管理されているのはこちらであることが理解されたのである。

この夕、全集最終巻の解題下書き出来上り。

「読んで下さい」

とおっしゃる。しばらく手が出ない。さしのぞくことは越権ではないか。再度の仰せによって読ませていただく。短文であるが、その言葉の深さ(彼女への愛)格調

(その心)の高さに胸うたる。どっとかなしくなる。おさびしそうな先生。曇りの空をみる。秋色の庭。時間とは何であるか。

夜、先生ニンニク食べられ下書きお清書。御苦心の様子。わたしは『美想曲』を読み進む。切々と時間が進む。端正な姿で書いていらっしゃる先生。左の目に左手をあ

てて。左の目は失明している方の目である。背後の書棚の上に、憲平ちゃん、高群家ご両親、橋本家ご両親の写真、そして彼女の写真の大写し、若かりし頃の夫妻の写真、松橋町から贈られた時計(ノートルダム寺院の鐘の音)である。

氏のお姿のあまりの刻みの深さに『火の国』ご執筆時の夜々のことを思い浮かべ、厳肅な感動につつまれる。その頃のお手紙。

——もう二カ月も、誰とも、ひとことも対話しない日々が続いています。ただ姿なき彼女と——

昨夜、この茶の間にて執筆にかかろうとすると、二階より、——さあんと呼ばれる声が出て、かけあがってみると、

「道子さんまた嘔吐感です」

とおっしゃる。心配ただならず。塩水つくってさしあげたが結局吐かれず。午前中摂生をねがったのであったが。静子さんに解題を書かれていること報告の手紙書く。

十月五日 はれ

先生お医者さまからあまりに遅く、心配になり門に出る。ちょうどおかえり。大へん御気分よろしいお顔である。とてもお天気ですから、彼女ゆかりの陸軍自動車隊跡と農大図書館にご案内しましょう、そのままの姿で上等等です。とおっしゃる。御自分のお姿はお医者さまゆき用の御めかしで！。わたしは庭掃除姿で先生の庭下駄をつっかけ素顔のザンバラ髪につきの当ったスラックス。先生は茶色スポーツウェアに合背広を腕におかけになっているのである。大きな庭下駄を鳴らしてお供する。

大蔵ランドまだ未完成。ここで彼女と東京発声映画時代のロケーションを眺められた話。勤皇の志士が祇園小

唄で出てきて、もやい舟に乗るところ、捕方が囲む場面となり、二・三十べんやったとのこと。プールがあった。このプールに舟を浮かべていた。二人とも俳優稼業にいたく同情したという話。世田谷四丁目郵便局を教えてもらう。帰途門を入りかけると右隣空煙を経て凝った建築のいつも人気が感じられぬ邸は古内家といい、デビ夫人ゆかりの家であると教えられた。

午後三時頃、わたしはノコギリを見つけ出して、かの大檜に挑みはじめた。切開して人道をひらくためである。お米屋さんが幹を越え、枝を乗り越え、芒の中に落ちこみ、はあはあいいながら米を持ちこんでくれ、「化物屋敷と聞いていましたがねえ、いやはや、大へんなどころです。あんた近頃来たお手伝いさん？」

というので「はい」というと、「そいつもあてえへんだ」といったので、牛乳屋さんや新聞屋さんの為に一念発起したのである。半分位ひいたところで先生二階からききつけて加勢して下さる。作業中、栗をみつけ、かん声。栗拾いに変更。夜茹でて、彼女の霊前に。

十月六日

解題について遠慮なく感想をのべるようにと申される

原本整理―誤記、誤植、字句修正―のみ終了)、彼女に原案の一閱をもとめるすべを失ったが、理論社社長小宮山量平氏の全集発行申し入れにたいし、ただちにこれを感じて承諾をなしたのは、著者との間に前述の経緯があり、多少の準備が行なわれていたからである。

ただ正しく告白して、いまこの一〇巻の編纂をもって彼女の許容なり、満足なりをもとめることができるかといえ、はなはだ覚束ないことである。私は形なき彼女との対話を執拗にくり返しつつこの編纂を完了したが、かえりみて心の痛むものがあることをいかにしてもしがたい。

第一巻―第六巻および第八巻の主著については、いうことはないが、第七巻ならびに第九巻においては、こう書いているまもろなく悩みをもったのであり、たとえば、既刊第九巻のなかの「路次裏の記1」の採録について、また、この第七巻のなかの「婦人戦線抄・ほか」の選択について、おそらく彼女のおもわくに私は添い得なかつたのであろうと思う。おなじく、この巻の「児童と道徳」などもそうであるだ

のでその通りに申し上げる。九時頃文章ととのったとおっしゃる。九時八分頃仕上げられた。評論集恋愛創生をもって全集の編纂を終えられた訳である。この森の研究室に(二階書斎)彼女が古事記一冊をおいて出発したころのことをお書き入れ。

比類ない愛の書完成。廢屋、老残、というお言葉がある。むべなるかなと思ひ、言葉なし。果実酒を黙って献じる。そして彼女の霊前には二粒の栗。

#### 解題／編者

この巻の刊行をもって高群逸枝全集全一〇巻は完結するのである。縁あって全集の著者の著述生活の始終をみとどけることになった編者たる私にとって、このことは、彼女にたいする一つの義務を果たしえたことになる。

全集編纂についてはすでに彼女の生前はよくその賛否をたしかめてみたことがあり、そこで私はよろこんで原案を立てることを引き受けたのであった。彼女生存中に事成らず(第一巻「母系制の研究」の

ろう。

このように私を慚愧させるものは、彼女最後の著作「火の国の女の日記」の「後記にかえて」の文中に、以下のように記されてあるようなことからである。

彼女はこれらのものには執着をもたなかった。折りに触れて、彼女はこんな話をしていった―

「日記一巻(「火の国の女の日記」)と追加研究一巻とができ上がったら、「過去の紙くず」は一切焼いてしまつて、また新しい出版をしましょう。あなたがかいたところへ行つて、そこで私は「女性の歴史」で書けなかつた未来像を叙事詩のかたちで描くでしょう。たぶん私の最後の詩篇となるでしょう」

過去の紙くずというのは、著書以外の、いくらか机辺にのこっている既発表ものの切り抜きをはじめ、未発表ものすべてを指していることはいうまでもない。むろん私(編者)も同調しようこんで「そうしましょう」とこたえたものだった。

全集には、はじめ、もう一巻、「平安鎌倉室町家族の研究」を予定していたが、編纂の最終段階で検討の結果、この原稿には書き込みが非常に多くて接合不明の箇所なども少なくなく、ことに表類にいっそうその難があり、その他にも書き入れ指定が果たされてない等、そのまま活字整版に付することは可能でないため、やむをえず、これは除外されるにいたった。別に、「日本古代婚姻例集」の採録も一応考えられたのであったが、その成果の精髓は「平安鎌倉室町家族の研究」とともに「招婿婚の研究」に吸収されていることではあり、強いて採録するにもおよぶまいとして、同じく除外されることになった。

この巻に採録をみた「恋愛創生」は一九二六年（大正十五年）万生閣＝平凡社から出版されたもの。この書については「火の国の女の日記」につきのように書かれてある。

「恋愛創生」は全文章節をもたない書き流しの論文であるが、いわばそのような形式が必然的に生まなければならないなかった環境と条件のもとに一気に

類をおさめ、それに未発表原稿から「平安鎌倉室町家族の研究一般公家篇はしがき」と「今昔物語集婚姻例表凡例」が加えられている。

「婦人戦線抄・ほか」は、事実上著者が主宰した月刊「婦人戦線」に書かれた時事評論に類した文章および他の一般新聞・雑誌等に載せられた同種のものにあつめられている。「児童と道徳」は「教育の世紀」に連載されたものである。

全集の著者は、その最後の多年に亘る一研究の基礎調査ほぼ成りまさに落筆の機を寸前にむかえながら、また一詩作の構想をもちながら、また老後のひとときの自適生活を予想しながら、一九六四年六月七日忽然と逝った。七十歳。

書いたものであるといえよう。内容は序文が示しているように、母子保障社会の主張―新女性主義―であるが、借り着のない自己の思想であり、私にとっては後の女性史学建設へのいろいろな芽ばえを持っているものとして、たいせつなものに考えている。

残念なことは、資料と時間とに制約されたのと、疑いもない著者の未熟とが相まって多くの誤謬をおかしていることであるが、母子保障の必然性から社会主義の肯定に到達していることや、遠い将来における婚姻制の廃止を考え、かえってそれによって夫婦の純粹な一体化が生かされるという、いわばエンゲルスの思想に、べつの道から到達していることが特徴といえよう。もっともエンゲルスの本はまだ私は、そのころまでは読んでいなかった。

ついでに言えば私の史的恋愛観は、のちになって「招婿婚の研究」、「日本婚姻史」、「女性の歴史」等に具体化してくる…。

「女性史研究の立場から」は、ジャーナリズムからもとめられて書いた自己の専門にふれた小論文の

あとにして思えば、死の当日、彼女はおそらく眼前の死の自覚なくして、はしなくも後事を私に託する発言をした。彼女を失っていまは廃屋と化した二階の一室、彼女が三〇余年前に机上ただ一冊の「古事記伝」を置き、「女性史学事始」をなしたその一室に、私はひとり老残を横たえて、未完のままのこされた彼女の自伝、「火の国の女の日記」の整理にいたがい、その刊行について理論社社長小宮山量平氏の然諾および全集発行の申し入れを受けるにいたる。かくて「火の国の女の日記」は一九六五年六月刊行、この書をも含む「高群逸枝全集」は一九六六年二月第一回刊行、同六七年二月最終回刊行をみる。彼女に負う私の義務もここに終わるのである。

…

# 母系制

高群逸枝

日本の母系制についてはこれを直接的にうかがう資料はない。しかし、系譜面において母祖観念から父祖観念へと切り替えられていく経過と、婚姻面において母系的招婿婚から父系的嫁取婚へと切り替えられていく過程とが、文献のうえで秩序正しく観察される。すなわち、原始共同体の変質過程に照応して、まず族長層をめぐって出自の父系化が進み、それが大化改新前後に至って一般化する。氏名・部名も母系を伝えたのが父系に変わる。ただ婚姻関係では招婿婚がなお持続され、その家族態は基本的に母・娘・孫娘の母系型をくずさず、室町時代に至って嫁取婚の確立とともに、はじめて父・息子・孫息子の父系型に変わる。したがって、奈良時代からみえはじめ夫婦同居も、いわゆる対偶婚であって嫁取婚ではなく、その夫婦関係は離合不定・別氏・別産・別墓である。要するにこのように長期間にわたって父系的系譜と母系的家族態とが併存し、父系の完全な勝利をまっ母

系終焉を示すのであり、この系譜および家族態の発展過程をめぐって、多くの母系的ないし母権的徴証が文献にみとめられる。それは卑弥呼の女治制や斎王・斎院・斎女・女官などに続く女性祭祀制、母系禁婚、「おや」の枕言葉の「たらちね」が「万葉集」までは母にのみ使われたのが、平安時代中期ごろからは父にも使われてくるというような過程における「おや」の観念の推移、室町時代ごろを下限とする氏産・家領における男女平等の財産占有権、およびそれと父系的私有財産制の成長との矛盾としてみられる女性の一期相続や養子相続、平安時代にみられる家号の母系的継承などである。これらから推定するとき確証はないにしても日本の原始社会が母系制であり、それが文献歴史の時期に入ってもなお衰滅までに長期間の尾をひき、そしてその内部から父系制を表面化していった事実があとづけられるであろう。



# 手紙と書き入れ

橋本 憲 三

一九六八年九月一五日

私はいま旅から絶望して帰るところです。さびしいむなし東京へ。私がおこへ明日の十二時にかえったとて何が私を待っています。

その晩は特別おそく帰りました。お手紙を見たときの心持は！ 胸が大きくどきんと一つうち、頭が火のように燃えあがったと思うと、私はもうすつくと立っていて頭を無性に何かにつけたい衝動を禁じえないのです。

お手紙を捨てては拾い、四・五へん読んで、その間にも何べんとなく二階へかけ上がった、かけ下ったりしたことを記憶しています。

寝まきがたたんであるのを見て、心が泣けて泣けて仕方がないのです。わるかったわるかったと幾十度口にしたことでしょうか。

こんなことをかくせいでしょうか、何だか急に頭がいたみ出します。あの夜は無論一睡もできません。ともすれば頭のからくりが、がらっと一時に崩れそうになるのです。また胸がふさがって、ちっ息しうにもなるので

す。外に出たり入ったりしたことも幾たびでしょう。ガタと風の音がすると、あなたが帰って来たのだと下へ見にいけます。

バタバタと布団の上や、畳の上をのたうちまわって何一つ自分の思想をまとめえないで、私は幾時間を過ごしたのでしょうか。

にわかに警鐘の乱打(注、近火)が耳元からおこりました。すると突然、  
「焼けてしまえ、どうせ僕も行くのだ」  
と、私は明瞭に独語したのです。

あなたがなくて、私に何の生活があろう。あなたと二人で、骨になっても、未来へも、どこまでもいっしょでなくては承知できぬ、どん底からの思慕と抱擁とが私にはあるのです。あれから、私は一睡もしません。布団や畳の上に寝たことさえありません。

そうした幾日の旅からいま帰りつつあるところです。私はこんどのあなたのなされたことを、ぜったいに承認

します。(ですから、ぜったいに承認しないことになり  
ます)

あなたは僕といなければならぬ。私は自分の思い上がり、わがままと、強要と、不快などの諸々の悪徳をたしかに自覚しました。私はさんげし、私の真のものをあなたに見ていただきたく思います。

月末にあなたの手紙が来れば、僕は一足飛びに飛んでききますよ。お目にかからなければならぬのです。それは必然そうです。それだけのぞみで帰ってゆくのです。

旅とはいっても、どうしていまの私に普通の旅ができたでしょう。私は紀三井寺へもいきました。粉河寺へもいきました。紀州から大阪へ、大阪から近江ビワ湖畔の長命寺とかへもいきました。そこでは長い間、竹生島から、もしやあなたをのせた船が来はしないかと見ていました。しかしすべてが絶望だったのです。私は帰ることにきめました。あなたの手紙を待ちましょう。

私はそれまで待ち切れなくて飛んで行ったばかりではありません。私は家をたたみみました。寝床もあのままでいったん飛び出しましたが、下中氏(注、社長)の言葉に従ってまた始末にいきました。何とその辛くものう

かったことぞ！ 小山君に手伝ってもらいました。大半片づいたところで、あまりつらいので小山君に後をまかせて、飛び出しました。

下中氏のところではあっさり、簡単に済まそうと思ったことが、ふいと自分でもだしぬけに涙がでてきて、さあ泣き出したものですね。はてはあなたがかわいそうだとか、きつと今頃はどこかで病気になるに違いないなどといって泣くのです。

あなたとわたくしの形而下的な家庭は、かくして短日月にほろびました。私たちは、こんどは形而上的な世界にすむのです。

ナベ一つ茶わん一つの生活にしましょう。

田舎の一軒家に行きましょう。

実は私は一日も早くあなたにお目にかかれていっしょに巡礼乞食したいと思いい家を捨てたのですよ。しかも手紙を待つ外にあなたをさがしだせる成算がどこからでてる筈もないのに、やっぱり私は一日も早くあなたを自分でさがしにいかないではいられなかったのですよ。

翌日、家を出てからの私は不眠不休でした。食事三日ばかり汽車べんを最初の日にたべただけです。一日に十里、汽車電車数百哩を行って、それで水とくだものだけ

ですましたのです。私はますます健康です。しかし今夜から手紙がくるまでが、手紙がきても、住所がないのだから会えるやらどうやら、しかしそれまでが気になります。<sup>\*</sup> 国の出来事のように病気にでもなったら、たぶんわたくしはこんどはバタリと仆れるでしょう。

米城内での共同生活の後、私は強度の神経衰弱におちいつて一時危機感に当面した、そのことをさす

(「火の国の女の日記」婚約のおとしあなの項参照)。

恋しい恋しい私の妻よ!

今にあなたのところへいきますよ。いっしょに回国<sup>かいく</sup>しましょう。

もう夜です。ですが今夜も不眠不休でやっつけましょ

う。  
そうそう、私が二階へ、下へと、かけ上がりかけ下っている最中に、いつかの熊本出身の労働者が来合させたのですよ。今夜は金はもっている、僕と酒を一合のもう、というので腹掛けの中に入れて来たのです。僕にどうしてそんなことができました。よほどおとなしい人のようです。少しばかり、怨みをいいました。気の毒で、気の毒で、私はどんなに自分の胸をぶちわって見せたかっ

たでしょう。

ああこんどいっしょになってからは、交友を吟味しましょうね。家には一切入れず、向こうの家にもいかず、手紙か、野原、林などの散歩の交際にしましょうね。

巡礼がすんだら、家をもちましよう。そして夏の休み一カ月はきつと僕がナベを背負って旅行につれていきます。

約半世紀—正確にいえば四三年前の私の古い手紙。鉛筆がき。署名もあて名も日づけもない。一九二五年(大正一四年)九月一九日に東京郊外東中野の家を出てしまった彼女のあとを追って、和歌山・大阪・滋賀をまわり、断念して近江八幡駅から汽車に乗り帰京、その夜<sup>よ</sup>の車中でしたためたもの(原文旧かなづかい)。

彼女は家出に際し書き置きをのこしていたが、それは八月末に居留でいってあげますから金を少し下さい、△西国に行きます、△山のお寺を見つ、恋愛論を書きます、△恋愛論の参考書はいって上げますから送って下さい、△といたような、私に彼女との接触の可能性を与えていた。また通読すると彼女の書き置きは、身柄は断絶したけれども愛を断絶しているのではなかった。

彼女は後に自叙伝「火の国の女の日記」を書くとき、自分の書き置きをとりいれることを回避した。あまりにバカな文章だといって。彼女にはべつに家出までの苦悩

の記録である「路次裏の記」があり、△存在価値を見失った女性△という傍題がついているが、これも自叙伝には回避した。彼女の死後に、彼女の全集を編纂することになった私は、右の「路次裏の記」および「書き置き」を全集から逸することは客観的に妥当でないと考えたが、彼女生前の意向を知っているのでまよった。結局、私情を忍んで採ることに決し、「路次裏の記」のなかに「書き置き」を挿み、なおそのすぐあとにつづく記録をも添えて、これを全集第九巻に収めた。

ついでにつけ加えておけば、家出から帰ったときに書いた「家出の詩」という長編詩は、彼女にしたがえばたぶんリコウな文章らしい。ここには彼女の家庭論の萌芽とその直截な立言がみられる。ただ彼女は、この詩は現在の社会や家庭を告発して、女性としての主張を前面におし出しているのみで、自分自身の悪徳については触れるところがない。それでこの詩はよくないといったことがあるが、私はこれも全集に収録した(第八巻)。

彼女が自叙伝を書くときに資料として「路次裏の記」

「書き置き」とともに、私の手紙をもさがしたのであるが、このとき手紙はみつからなかった。

「あなたがいつか取り上げてしまったとき、焼いたんじゃない?」

私がいづか取り上げたことはおぼえがあるが、これは焼きはしなかったはずである。焼いたのはべつのものでまたこれより後のことであった。彼女はこの手紙を封筒に入れて、それに「逸枝おまもり」と私に上書きさせて身辺に置き、世田谷の森の家では、毎日つかっている研究カード箱にはさんでいた。それで私は△もういいでしょう△といってそれを取り上げたのであるが、そのかわりに封筒の文字と同じものを小さな紙片に書き、彼女は赤い布切れに縫いこめ、それを頸から胸の奥に吊っていたのを、あるときまた取り上げてしまい、このときそれを庭の枯れ葉の上で焼いたのである。しかし、もうそれ以上せんさくする必要もなくなったから、手紙のことはそのまま忘れちゃった。

この手紙を書いてから数日後—九月二八日に、私は新宮駅前のたしか新宮館といった旅館に彼女を訪うことができた。玄関の敷台の前に立って待っていると、奥から

出てきた彼女は、私のほさほさした頭髮のなかに手をつっこんで、「あなたおやせになったのね」といった。彼女の部屋にいて、そこで折りたたんだ手紙をわたし、彼女がそれを読んでる間に宿の勘定などをすまし、山の温泉をきいてすぐ外へ出た。駅からバスが出るのとことだった。

手さげ一つの彼女にほかに何かないかとときくとないという。たぶん女中さんへのこしたのだろう。「巡礼の支度は？」とまたきいたらそれもないというふうに頭をかき上げてみせた。彼女は縞ちりめんの黒地に薄い緑と白との直線の模様が縦に流れている単衣を着ていた。私はといえれば着古した背広。奇妙な対照だったろう。

駅では大阪毎日の記者に会った。それでバスを待たず、途中から乗り込むことにして街を後ろにした。山裾のあちこちの叢中に莖の高い曼珠沙華の妖しいばかり美しい大輪の花冠を持ち上げていたのがひどく印象にのこった。二人は奥地に向かって幾曲がりする山坂をゆっくり歩いて行った。

山の温泉は名前が忘れてが行ってみるとまだ開発中らしく新しい旅館が一、二あるばかりで、内湯もなく、部落のものとの共同混浴の素朴な野天風呂が崖の下にあっ

た。ぬるま湯だったがそのことは私たちには幸いした。星空の下で虫の音をききながらしばらく時を忘れたことだった。

ここに数日滞在しているうちに東京に引き返そうということになった。彼女の発議だった。

来た道とは反対の方向にゆくバスで山峡を下り、加古川に一泊。そこから汽船ののって翌朝鳥羽に上がり、名古屋から中央線の汽車に乗った。汽車が山の中を抜けてある峠の駅にさしかかったとき、急に彼女は下車したいといひ出した。「すこし歩きましょう」―前の席の人からみられているのがこまったらしくてところかまわず逃げ降りたのである。これはまた無人の峠道で、まだ若いすずきの穂と青い桔梗の花が風にゆられてる中を、こちらもゆらゆらと歩いていく。それで二人はたのしかつたというべきだろう。細い道はいけどもいけどもつきない。とうとう彼女の方が疲れてきた。私はやつの思いで次の小駅に彼女を引っぱってゆき、それから中津川という駅において、木曾街道のがっしりしたつくりの古い旅館の奥の離れめいた一室にようやく落ち着かせることができた。

「おまもり」が焼かれてから若干の歳月が過ぎて彼女が死んだ。その死は同時に森の家の終焉だった。私はひとりここを立ち去るにあたり彼女の遺品をとりまとめたが、そのなかにこの古い手紙もはいつていた。私は建墓のちこの手紙を読んだ。すると手紙の末尾に彼女の小さなペン字でつぎのように書き入れがなされていた。

大正十四年十二月十日夜。まだお帰りになりません。今夜もこのお手紙を出して見ました。もう何処にも行きません。あなたに仕えようが足りないとき、私はこのお手紙を出して見るのです。

私とあなたがこの地上から去って後もたぶんこのお手紙は残りましょう。私は王様のお姫さまよりなお幸福です。夢と血と愛をえて、天国に行くことができるのですもの。

あなたも私も地上では貧乏な夫婦でございます。人はみな誤解しています。けれども何一つ私をいまはあなたから裂くものはない上に、私はよろこんであなたとならば死を迎えましょう。私ほどの生の執着をもつた女でも、この不可思議な事実を心のなかに確めうる

とは、まあ何て不思議でしょう。愛がはるかに死よりも強いことを今私は知り、この上なく喜んでいきます。いつでももう死ねますから。

このさき幾年生きるでしょう。なるだけおじいさんとおばあさんになるまで生きましょうね。私はまだ仕えかたが足りません。心ゆくまでつくしてからなら、何の思い残すこともない\*。

＊この書き入れは、単なる「てずさび」のみではなく、一種のいわゆる「せいもん」でもあり、つまり彼女はここに「誓文固」をしたのである。後の「誓い」(全集第10巻482ページ参照)に通じよう。

付記 東京に帰った二人は「ナベ一つ茶わん一つ」において再出発した。しかし、森の家庭生一研究生活建設までにはなお六年の時があった。

# 母への手紙

第一号を読んで

石牟礼道生

心と心との対話を持つことのできる人間同志で、どうしてこうも醜い対話しかできないのだからか。

しかしそのようなときに、理想、想像の世界のことではなく、今日の前に映るお二人の「愛」こそが（最近驚きも、感心も示さなくなった私をひさしぶりにふるえさす）今までに私が知り得る限りでは最高のものと確信します。

あの御老体（失礼かとは存じますが）から誰が、この愛の深さを計り知ろうか、いえとにかく、つくづくためいきです。「一星のふる月の夜などにはつい墓に

いって語りあいたい、というようなこともあるから……」

妻を思う詩人を何人か知っています。それを歌った詩も。

しかし、夏にはしきりにその麦ワラ帽子を手でさすり、秋にはあなたのいれた

僕は一強じんなる魂といわねばならん」というくんだり、ほんとうに楽しくてしようがない……しかしこういう「愛」はその人達にだけいろいろなことを経てものでしょう。

ところで今日一〇月二二日、国際反戦デーとか。今テレビでもそして下宿の前をある大学の学生達がデモしながら行きます。もし私が、その雰囲気のある大学に行っていたら、私も今頃は一番になつてよく解らないままに石を投げているかもしれない。（二二日午前一時三十分テレビで特別番組として報道しております）

私のいる大学は、まったく無関心。どうしようもない。私の場合決してだまっているわけではありません。ただ、今の私には自分自身に強い信念というものがありません。しかし同じ世代の若者達のことには無関心でいられる筈がありません。客観的にみつめながら、七〇年までは、身のふり方を考えます。必死

お茶をうまそうにすすっていたあの御老人が、ただためいきです……

「愛」とくに私の場合、異性への愛は、どんな恋愛論にもよらず、自分だけの美しい、誰の物まねでもなく、そういうものにしたいたいと思っています……

しかし、このようなことを知るととも「まね」はおろか……近よりがたいものを感じます。

なんだか、とても心がなごみます。私もこういう本物の「愛」というものをもりたいものです。

「彼女を全として生きた私には……余生とか養老とかのことばはあたらない」そういわれるとたいへんさみしくなります。ここに一人身をうちふるわすほどの感動を覚えたものがあると（決して大げさな……とは思いません）どうかよろしくお伝え下さい。とくに、

「あいつめのことをね、吸血鬼！」と

## 火の国の女の日記

火の国の女  
日記

※キユイ夫人伝を連想し稀有の書の一。（日本読書新聞）  
※天才妻と夫との極限の愛——尊い男女記録。（週刊朝日） 瀬戸内晴美氏  
※生涯を情熱に過して——生きた資料。（朝日ジャーナル） 豊田正子氏  
※眞の女性解放者・高群逸枝——20世紀の贈物。（社会新報） 松永伍一氏  
※女性学者の特異な生涯——応えてくれる本。（週刊読書人） 村田静子氏  
※愛と結婚の記録——純粋さに憧れる内部的強さ。（図書新聞） 秋山清氏  
※魂の欲求——画期的自伝文学。（思想の科学） 渋谷定輔氏  
※偉大な業績を持つ著者生涯の回想記。日本図書館協会図書選定委員会  
高群逸枝遺稿・一四〇〇枚／菊判五〇頁／巻頭写真八頁本文五三三頁／価一五〇〇円／90円

理論社 振替東京 95736

## 火の国の女の日記

高群逸枝自伝  
全集3刷出来  
価1500円 90円

★大業をなし現世の喜びた夫の愛二つ。△熊本風土記▽ 石牟礼道子氏  
★特異の夫婦一体の研究生活——彼女の偉業を促す。△日本▽ 鈴木二郎氏  
★奇蹟的な夫婦の愛に生きた天才の火の生涯。△婦人公論▽ 瀬戸内晴美氏  
★安心して夫に甘えきっている妻の姿と…… △思想の科学▽ 竹西寛子氏  
★夫を庇護者とおき密室でたつまはゆい塔。 △読売新聞▽ 中村きい子氏  
★比類のない自伝——妻・詩人・学者の一生。 △週刊読書人▽ 橋本万平氏  
★同志的の一体の生活と戦いのあかし。 △婦人問題懇話会報▽ 山崎朋子氏  
高群逸枝全集全10巻完成記念セット販売中／菊判函入総価一七、〇〇〇円／案内呈下25円

理論社 振替東京 95736

話は変わりますが今オリンピック。ブックパワーのものすごさ、すでに御存知のことと思います。そしてついにやりましたね。スポーツにおける政治的中立などという名分とは大きく違った、現実的に金メダルを捨ててまで、世にうったえるというたいへん興味深い事態になりつつあります。黒人問題のよいきっかけになればよいのですが（スポーツのあり方について強い疑問を持っています）。

あなたがいるところのものはすべて超越して、そんなことをさりげなく話すあなたそしてときには、まだなんにも知らない幼い少女の澄みきった心のように、でも恥らいながら知ろうとして、またためらう娘のように（体育学部学生）

たより



村上信彦

：石牟礼さんのような人もいるのですね。お年は存じませんが、健筆を折っています。

私が書くとなれば、高群史学の立場から柳田国男にふれてみたいのです。これは前から感じていたことですが、あまり誰も触れていないので。

ただメ切が十一月七日というのでいささか心配しています。いま私は本筋の仕事以外はテレビも講演もことわっているのですが、どうしても断り切れぬものが二つほどあります。なんとか間に合えばよいがと思っています。

私の明治女性史も七百枚になりました

が、まだ文明開化のあたりをうろついている始末で、何枚に

なるか自分にも分りません。：つい三時

四時に起きてしまいますこの手紙も三時に起きて書いています。「著書「服装史」「女性―どう生きてきたか―」「ゆがめられた性」・東京」

河野信子

高群逸枝雑誌ありがたく拝受いたしました。いままです著書をできるかぎり読みつけ、このような研究者を持つことができましたのは、日本の女の誇りだと考

### 日本婚姻史

高群逸枝著

このほど第四刷が出来ました  
B6判布装 定価四三〇円  
東京都新宿区弘方町二七 至文堂

えています。

高群逸枝との出遭いは私たちに生きるための根源を打ち込んでくれます。志をつぎたいものといまは懸命でいます。この雑誌ができましたこと女の論理をきわめようとすると助けになることでしょう。：雑誌の発展を祈ります。八月刊「無名通信」主宰・福岡市小笹住宅2組38号

### 学習会だより

合田宏子

とりあえず、どんな形で学習会を持つているかの報告を

(1)全集「女性の歴史一」をテキストにして三多摩地区で。

女教師中心（ほとんどが赤ちゃんをかかえています）。メンバーは10名くらい。月二回土曜

日の午後。持ちまわりレポーター方式。このグループは「女性の歴史」に入るまえにベール「婦人論」を読々、学習会としては二年余りになります。

(2)テキスト「女性の歴史二」。都内で。

働く婦人10名前後で、隔週の火曜日夕方から行なっています。やはり持ちまわりリーダー。一年ほどになります。〈東京〉

松永伍一

このたびは「高群逸枝雑誌」をお届け下さいまして、ありがとうございます。

いい企てで、本当にうれしく、高群先生の偉業が、全集の刊行とともに、人々の心にしみ入っていく具体的な姿がここで見せられるのだとおもうと、たまたまなく幸福になります。先生と名もなき多くの読者との魂の交響が、それ自体ひとつの文化史を形づくっていくのは、すばらしいことだとおもいます。：〈新著「日本農民詩史」・東京〉

長井魁一郎

「高群逸枝雑誌」ありがとうございます。素晴らしいお試みと申し上げると嘘になりそうで、悲しみがこもった生命がけのお仕事だと、きびしいものを感じました。

飯島伸子

先日のお彼岸の日、妻、子ども二人（保育園児）を伴って逸枝先生にお詣りいたしました。墓所わきの畑仕事の農婦にお住いをきき教えてもらいましたが、湯の児に子どもをつれていたり、16号台風まえの空もようから、お伺いするのを断念してかえりました。それでも念願を果たして静かな心になりました。〈作家・熊本〉

朝倉氏作の高群逸枝像は、今春、朝倉氏のアトリエに石牟礼道子さんを御案内いたしましたときに拝見させていただいたこともありまして、「雑誌」二頁の写真が大変なつかしく感じております。

石牟礼さんの「最後の人」、期待いたしております。登場人物は石牟礼さんか、ら伺った方々が多く、生き生きと受けとれて嬉しいです。〈東大助手・横浜〉



## 編集

### 刊行の趣旨ときまり

- ①この雑誌は高群逸枝に関する研究成果ならびに資料の掲載を主たる目的とし、季刊をたてまえとする。原稿生産の遅速・分量によって発行回数またページ数の増減が考えられる。編集同人の合議制によって運営される。
- ②研究論文・エッセー・評伝・創作等、表現の形式は自由である。
- ③特別寄稿〈同人外の寄稿〉のために相当のスペースをあてる用意がある。たとえば数百枚の長編でも分割完載されよう。
- ④読者の感想・学習グループの通信などを歓迎する。
- ⑤雑誌の継続希望者は、(1)前もって申し込んで置いて下さい。そして雑誌が届けられたとき定価のみ〈送料加算不要〉送金して下さい。切手代用でも構いません。(2)適宜に前金を預託されて置いても可。いつでも精算の必要があるときは残金を返却します。

### 編集室メモ

▷この雑誌の命数せいぜい20号くらいと思わざるをえない理由がある。

仮に30号にふやすには季刊から隔月刊にするほかないが、それには原稿生産が伴わないうらみがある。それどころか締め切り日に原稿が一つもないという事態がしばしばおこり、延刊から永久休刊へと逸早くおち込むおそれだつてないとはいえない。原稿が天からふつてきたり地からわいて出たりしないかと思う。たまたまそんなものに恵まれるとありがたいし、特定の執筆者からあとからあとからと続いて書いてもらえるなら一層ありがたい一安定するから。

▷この雑誌の趣旨と性格を理解してただいてすばらしい玉稿を送って下さい。次号締め切りは2月7日。

▷特別寄稿は、全集を読んだ人びとに期待したい。それも労作を期待したい。全集はすでに相当普及しているから不当な期待ではない。ただそれらの人びとにどうしたらパイプをつなげるか一に致命的ともいえる困難がある。

▷この雑誌の製作部数は500部。当面の所要250部。あとの250部は公共機関、団体および個人に寄贈される。しかしたとえば全国の図書館(大学図書館を含む)におくるとしてもそれだけで250部ではたりないのだから、すべてこの寄贈先は順ぐりということになろう。

(本号当番)